

岡田清先生をお送りして

—感謝と追憶—

宮川 豊章*

岡田清先生は昭和33年（1958年）から昭和61年まで、京都大学工学部教授として28年間にわたりわが国の土木材料学・コンクリート工学の指導者として教育と研究に取り組まれました。京都大学を定年退官後は、引き続き福山大学の教授として、平成9年3月まで務められ、教育と研究また大学の運営発展に尽力されました。その間プレストレストコンクリート技術協会、土木学会、日本材料学会、日本コンクリート工学協会、日本学術振興会、関西道路研究会、コンクリート研究会、国際アルカリ骨材反応委員会など、数多くの組織で要職に就かれました。福山大学ご退職後は、京都の麩屋町に設けられた岡田材料研究会において、後進の指導にあたってこられました。しかし、昨年夏から体調を崩され、今年1月12日未明にご逝去されました。土木材料・コンクリート界に素晴らしいご業績を残されての84年のご生涯でした。

先生は昭和20年9月京都帝国大学工学部土木工学科をご卒業後、京都帝国大学の助手に就かれました。当初は、橋梁工学の高橋逸夫先生に仕えられました。その後は近藤泰夫先生の下におられました。京都大学講師、助教授、さらに教授となられ、土木材料学講座をご担当になりました。途中、昭和24年から昭和31年までは、第2代と4代の2度にわたって本協会の会長をされた、建築学科の坂静雄先生の下にもおられました。先生は、近藤先生の衣鉢を継がれたわけですが、坂先生から受け継がれた大事なものもあったように思われました。先生のイメージには京都の良き時代の大学教授という印象がありました。京都帝国大学の良さを、京都大学の良さのなかに活かしておられるように感じたものです。京都大学土木のキャンパスは、昨年秋、100年以上の歴史をもつ吉田キャン



岡田清先生

パスから離れ、桂キャンパスに移転しました。まるでその移転にあわせるかのように先生が亡くなられ、古き良き時代の京都大学の面影が一段と薄くなったことは本当に残念です。

先生のご講義は真摯なものでした。今でも目に浮かぶのですが、私の、修士I回生の1月のある日の講義のことです。冬のI時限目の講義で、雪のため私が少し遅刻していったところ、教室には先生お一人しかおられませんでした。教壇に憮然として立っておられた先生は、私が部屋に入るなり言われました。「では始めよう。」たった一人の学生に対する講義が始まり、しばらくして同級生諸君がやって来たので、ほっとしましたが、あの

* Toyoaki MIYAGAWA : 京都大学大学院工学研究科

時の講義ほど緊張した講義はありませんでした。

先生のご研究は、土木材料・コンクリート工学が中心でした。(1) コンクリートの乾燥収縮・クリープ、破壊挙動、アルカリ骨材反応、鉄筋腐食などの材料物性に関する研究、(2) 各種混和材料、特殊セメント、PC 緊張材、各種高分子材料などの建設材料の開発と適用に関する研究、さらに(3) 梁、柱、床版を含めた鉄筋およびプレストレストコンクリート部材の各種荷重条件下における挙動に関わる構造工学に関する研究、などを強力に推進されました。土木材料からコンクリート構造までの幅広い分野を視野に入れた、かたよりのないものでした。

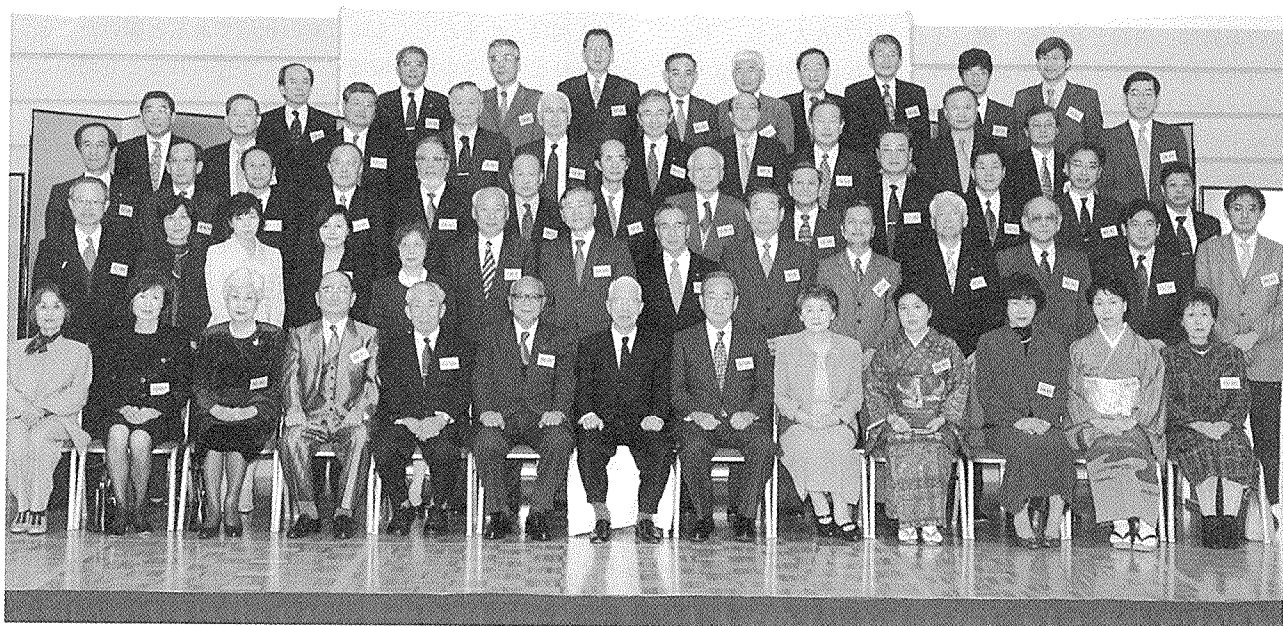
材料と構造を分離してはならない、というのが先生の基本的なスタンスでした。材料から見た構造、構造から見た材料が、幸福な出会いをするところに、コンクリート構造物があることを教えていただいたと思っています。その時空間のなかで、最終形態としての構造物が発揮する性能が、われわれにとってもっとも重要な問題なのであって、ここに性能規定が成立するものといえます。性能基準に関する日本で最初の報告書を書かれたのは先生でしょう。また、アルカリ骨材反応のわが国における本格的な研究は、近藤先生を濫觴としま

すが、現実の構造物と関連づけた、体系的な研究は先生が指導されたといっても過言ではないでしょう。

「コンクリートは一人ではできない。みんなの力を合わせて作るものである。」とは、先生が常づね言っておられたことでした。先生のご行動は、ご自分を中心としたものではなく、コンクリート界のみんなのために、がその規範でした。その背景の下に先ほどの言葉をお使いになられたものと思っています。先生のご研究はかたよりが無く深く、ご教育は包容力のある暖かいもので、先生を慕いその指導を受ける弟子は多く、ご逝去される直前まで岡田材料研究会を主宰しておられました。先生のお人柄があつてこそその研究会でした。下の写真は、先生の傘寿をお祝いした時のものです。

先生とは、種々の機会にご一緒させていただきました。筆者を含めて、きわめて多くの土木材料・コンクリート関係者が、先生から多大なご恩を受けました。残されたものの使命は、その遺志を継いで行くことであるとあらためて決意している次第です。

先生のご冥福を心からお祈りし、結びの言葉とさせていただきます。



八十路会